

使徒の働き21章10-14節 「みこころのままに」

1A 苦しみをともなう御心

1B ゲッセマネの園の祈り

2B パウロの苦しみ

3B ご自分の前に置かれた喜び

2A 主にお任せする心

1B パウロを思っでの引き止め

2B 任せるところにある平安

1C 信仰者の足跡

2C 最善のご計画

3C 主への信頼

本文

使徒の働き 21 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒 20 章まで来ていました。今日は 21 章で、午後に一節ずつを見ていきたいと思います。今朝は、10-14 節を読み、特に 14 節に注目します。「¹⁰ かなりの期間そこに滞在していると、アガポという名の預言者がユダヤから下って来た。¹¹ 彼は私たちのところに来て、パウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って言った。「聖霊がこう言われます。『この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。』」¹² これを聞いて、私たちも土地の人たちもパウロに、エルサレムには上って行かないようにと懇願した。¹³ すると、パウロは答えた。「あなたがたは、泣いたり私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」¹⁴ 彼が聞き入れようとしないので、私たちは「主のみこころがなりますように」と言って、口をつぐんだ。」

今朝はこの「主のみこころがなりますように」と言った、弟子たちの言葉をかみしめていきたいと思えます。

パウロの宣教旅行の旅は、アジアやギリシアから、ローマへと向かいますが、その前に彼はエルサレムに行かなければならないと決めていました。エルサレムに向かう中で、聖霊がパウロに対して、ずっと、「鎖と苦しみが待っている(20:23 参照)」と証しておられました。船でツロという町に到着して、そこで一週間、弟子たちと時間を過ごしましたが、彼らも御霊に示されて、「エルサレムには行かないようにとパウロに繰り返し言った。(21:4)」とあります。そしてカイサリアに着き、これまで以上に、はっきりと預言者アガポの口を通して、「この帯の持ち主を、ユダヤ人たちはエルサレムでこのように縛り、異邦人の手に渡すことになる。」と告げられたのです。異邦人の手に渡

すというのは、ローマ当局の手に渡るということであり、イエス様が十字架刑に処せられる時、イエス様ご自身が、異邦人に渡されると言われました。つまり、死をも意味するような言葉です。

それで、パウロの同行していたルカたちも、また、カイサリアの兄弟たちも、エルサレムには昇って行かないように懇願しました。けれども、パウロの決心は堅かったのです。「私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」とっています。そこで、彼らの言った言葉が、「主のみこころがなりますように」というものです。

1A 苦しみをともなう御心

苦しみが待っている、死ぬかもしれないということに対して、御心になるようにということです。つまり、神がそれをお考えになっているのであれば、その通りにしてくださいという告白です。苦しみとまでは行かなくとも、これは絶対そうあってほしくない願っていたものが、そうでなかった時、私たちは、「みこころのままに」と神に任せることが必要です。

1B ゲッセマネの園の祈り

ここで見て行かなければならないのは、イエス様のゲッセマネの園での祈りです。御父の御心に従うということは、十字架につけられることでした。イエス様は、苦しみ悶えました。ご自身が苦しむことは初めからご存じでしたが、しかし、罪を負われるため、父なる神から見捨てられる経験をされます。そのことが耐え難いことでした。「マタ 26:39 わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」父のみこころにゆだねる決断をされました。それから、主は十字架の死に至るまで、そこには苦しみはありましたが、けれども心は定まっておられました。兵士たちが園に来て、イエス様を捕えた時に、ペテロが剣を振りかざして、大祭司のしもべの耳を切り落としました。けれども、イエス様は、「ヨハ 18:11 剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を飲まずにいられるだろうか。」と言われました。これが、私たちの模範であるとペテロ自身が言っています。この時は、イエス様のためを思って、剣を取ったのですが、イエス様ご自身から戒められました。このことを知ったペテロは、こう言っています。「I ペテ 2:21 このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」イエス様に従うのであれば、自分にとって好ましくないことが起こっていたとしても、それでも御心であれば従っていくという決意が必要です。

2B パウロの苦しみ

パウロは、鎖や縄目が待っていると言われても、それで引き下がるような人ではありませんでした。彼は、すでに多くの苦しみを経てきました。それでも、主の言われることに従って来たのです。主が言われるのであれば、行うのです。そうした覚悟を私たちは持っているでしょうか？パウロは、回心した直後に、主によって自分が苦しまなければいけないことを告げられていました。「9:16 彼

がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」私たちは、キリスト者になれば、バラ色とまで言わないけれども、良い生活が、幸せな生活が待っているという願いが出てきます。けれども、もし信仰を持てば、苦しみが待っていると言われて、それでも信じることに決めましたでしょうか？これまでの信仰者としての決断の中で、前もって苦しむことが分かりつつも、それでもこれが主のみこころなのだ知っているのです、それを選び取ったことはありますか？もしなければ、イエス様が信仰の目標になっていないのかもしれませんが。

パウロは、主に前もって告げられたように、次のような苦しみを受けていました。コリント第二 11 章 23 節から 28 節です。「23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。24 ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、25 ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。26 何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、27 労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。28 ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。」

それでも、パウロはこの方について行くに値すると思っていました。イエス様にあって苦しむのであれば、そこにイエス様の復活も知ることができることを知っていたからです。「ピリ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、キリストの苦難にもあずかって、キリストの死と同じ状態になり、何とかして死者の中からの復活に達したいのです。」キリストにあって苦しむならば、必ずや生けるキリスト、復活されたイエス様を知ることができるという喜びがあります。いかがでしょうか、生ける主にご自身が出会った時に、それは自分が快適な時でしたか？それとも困難や試練が会った時ですか？快適で幸せな時は、自分に慢心する、自分に満たされるかもしれませんが、自分に絶望している時、自分には何も良いものがないことを知っている時、自分の限界、自分の死を知っている時に、その時に、今も生きていられるイエス様を知ることができるのではないのでしょうか？

3B ご自分の前に置かれた喜び

イエス様が、父なる神から復活、そして御父の御許に行くことを知っておられて、その喜びがあったので、苦しみを耐え忍ばれました。「ヘブル 12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもとせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」ご自身が栄光にあずかることを知っておられたので、その喜びがあったので辱めと十字架を忍ばれました。神は、一時的な慰め以上に、とこしえの慰めを与えることを願われています。けれども、私たち人間は、とこしえの慰めではなく、一時的な慰めを求めてしまうのです。そのために、ヘブル書の著者は続けて、「12:4 あなたがた

は、罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」と言いました。

パウロや他の使徒たちは、とんでもない苦しみと虐げを耐え忍びました。使徒の時代だけでなく、その後の初代教会の人々も同じです。歴代のキリスト者は迫害を受け、殉教しました。そしてたった今世界中で、イエスを信じるというだけで、投獄され、拷問を受けている人々もいます。けれども、私たちは室内の温度が寒すぎる、あるいは暑すぎる、今日の賛美の時の音響が良くないとか、そういったことを不満に思うという肉の弱さがあります。それでヘブル書の著者は、「罪と戦って、まだ血を流すまで抵抗したことはありません。」と言っているのです。つまり、苦しみから免れるために、みこころを行っていないということがあるのです。迫害が少ないのではなく、迫害を受けないように前もって逃避していると言ってよいでしょう。

2A 主にお任せする心

1B パウロを思っでの引き止め

ところで、パウロの友人たちは、何とかしてパウロがエルサレムに行かないでくれと懇願しています。これは、パウロを思っでのことであり、彼が苦しむのを見たくないからでした。兄弟に対する愛情がここに伝わってきます。このように、時に私たちは、友のことを思いやるばかりに、その人が神に従うのを妨げてしまうことさえあります。しかし、「私は主イエスの名のためなら、エルサレムで縛られるだけでなく、死ぬことも覚悟しています。」とパウロが言ったので、彼らは「主のみこころがなりますように」といいました。

2B 任せるところにある平安

ここに、私たちは平安を、安きを得ることができます。どんなことがあっても主の願われるままにとする時に、初めて本当の平安を得ることができます。「I ペテ 4:19 ですから、神のみこころにより苦しみにあっている人たちは、善を行いつつ、真実な創造者に自分のたましいをゆだねなさい。」

1C 信仰者の足跡

聖書の中には、そのようにして自分の魂を真実な創造者にゆだねる人々の証しがあります。まず、ヤコブです。彼はこう言いました、「創 43:14 私も、息子を失うときは失うのだ。」

ヤコブの十二人の息子のヨセフを、兄たちが奴隷として売り、ヨセフがいなくなりました。しかし、主が彼と共におられて、ついに彼はエジプトの総理大臣にまでなります。しかしヤコブには、そんなことは知りません。世界に飢饉が訪れました。ヨセフは、エジプトの穀物を管理していました。ヤコブは、兄息子たちに穀物をエジプトで買うように言いつけました。けれども、ベニヤミンは行かせませんでした。以前、兄たちが羊飼いをしているところにヨセフを使いに出した時に、ヨセフがいなくなったのです。彼らは、野獣に引き裂かれたと言っていました。兄たちの手の中でヨセフがいなくなったのです。それで、同じ母ラケルから生まれた末の子ベニヤミンは、何としてでも失わせな

いと思っていたのです。

ところが、ヨセフは、兄たちが自分に対して行ったように、弟のベニヤミンに対して酷く扱っていないか気になっていました。また、兄たちが、自分のしたことを悔いているのかどうか知ろうとしていました。そこで、ベニヤミンが来ていないのを見て、「あなた方の弟が来るまで、兄弟の一人を監禁しておく」と言いました。シメオンが縛られました。それでヤコブのところに戻ってきました。父ヤコブは、恐れと悲しみでいっぱいになりました。「42:36 父ヤコブは言った。「おまえたちは、すでに私に子を失わせた。ヨセフはいなくなり、シメオンもいなくなった。そして今、ベニヤミンまで取ろうとしている。こんなことがみな、私に降りかかってきたのだ。」こうして、絶対にベニヤミンは行かせないとしたのです。

ところが、飢饉はまだ続き、それでヤコブは食糧を買ってきてくれと言いましたが、ユダが、エジプトにいるお代官様が、弟と一緒になければ、私の顔を見てはならないと言ったと思い出させました。それで、彼自身がベニヤミンの保証人となると言いました。つまり、何かがあったらベニヤミンに代わって自分が責任を取るということです。それでヤコブは、ついに連れて行って良いと言ったのです。「43:14 全能の神が、その方の前でおまえたちをあわれんでくださるように。そして、もう一人の兄弟とベニヤミンをおまえたちに渡してくださるように。私も、息子を失うときには失うのだ。」神に憐れみを願いましたが、しかし、たとえそうでなくとも、息子を失ったとしても、みこころのままにと言ったのです。このように、主に任せたら、どうなるのでしょうか？ヤコブは、そのお代官様が自分の失ったヨセフであることを知ることとなります！

ダニエルの友人、ハナンヤ、ミシャエル、アザルヤのことを思います。バビロンの王ネブカドネツアルが、金の像を造り、バビロン全土の高官たちをすべて召集して、その奉獻式でその像を拝むように命じました。「3:6 ひれ伏して拝まない者はだれでも、即刻、火の燃える炉に投げ込まれる。」というお達しでした。すべての人がひれ伏したのですが、三人は拝みませんでした。ネブカドネツアルは問い質しますが、三人はこう答えました。「ダニ 3:17-18 もし、そうなれば、私たちが仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ、あなたの手からでも救い出します。18 しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々には仕えず、あなたが建てた金の像を拝むこともしません。」神は救い出すことができると確信していましたが、大事なのは、「しかし、たとえそうでなくても」であります。たとえそうでなくとも、主のみこころのままになりますように、ということです。主にのみ仕えることで、火の燃える炉に投げ込まれても、それによしとするということです。

2C 最善のご計画

私たちがここで、知らなければいけないことは、神のみこころに任せるということは、神が良いお方であり、最善を願っておられることを知っているから、任せるのだということです。自分の強く願

っていることを手放すのですから、何か神が自分にとって恐ろしいことをしているけれども、それでも従わなければいけない、ということではないのです。恐れによれば、真心から従うことなどできません。必ずボロが出ます。恐れによれば、従っているように見えて、結局は退くこととなります。

預言者エレミヤは、ユダの国がバビロンによって滅ぼされることが分かっているながらも、主が、バビロンの王を用いて彼らを回復させる神のご計画が示されていました。それで、バビロンが攻めに来た時に抵抗しないようにということも教えていました。これも、「主のみこころのままに」という信仰です。それは、神殿が根こそぎ破壊されて、エルサレムが潰されるというとてもつらい苦しいことですが、しかし、神は良い計画を持っておられるという信仰です。「エレ 29:10 まことに、【主】はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにいつくしみの約束を果たして、あなたがたをこの場所に帰らせる。11 わたし自身、あなたがたのために立てている計画をよく知っている——【主】のことば——。それはわざわざではなく平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。』

パウロが語った、よく知られている言葉も、キリスト者の受ける苦しみが背景となっています。「ロマ 8:28 神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことがともに働いて益となることを、私たちは知っています。」この御言葉をクリスチャンは良く知っていますが、けれどもパウロが 18 節から語っていることの続きなのです。「8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。」そして、被造物がうめいていて、自分たちもうめいている。御霊がそのうめき、肉の弱さを助けてくださる。そして、神がご計画を持っておられる、と言う流れです。そして、結論として、「ロマ 8:35 だれが、私たちをキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。」これらのことがあっても、圧倒的な勝利者であり、神の愛から引き離すものは何もない！と断言しているのです。神がどれほど御子によって私たちを愛しておられるのか、知っているからこそ、苦しみの中にあっても御心に従うことができます。

3C 主への信頼

ですから、私たちは主を信頼しましょう。「正しい人はその信仰によって生きる。(2:4)」という言葉は、預言者ハバククが語りました。そしてパウロが、ローマ人への手紙で引用しています。そのハバククも、これからユダの国に来る苦しみを知っていながら、神からそう言われたのです。神が必ず良くして下さることを知っていたので、ユダの地から作物も育つことなく、家畜もいなくなっても、それでも、「3:17 私は主にあつて喜び踊り、わが救いの神にあつて楽しもう。」と言うことが出来ました。今、起こっていることは理解ができません。だからこそ、信仰をフルに働かせるのです。「それでも、ここに神がおられる」と。イエス様がそれでも、すべてを支配されていると。自分には、分からないけれども、強く、熱く信じ続けるのです。